

持続可能な水田農業を支える「大崎耕土」の伝統的水管理システム



～厳しい自然環境が洗練された農業システムをつくりあげた～

大崎耕土
世界農業遺産



OSAKI
KOUDO
GLOBALLY IMPORTANT
AGRICULTURAL
HERITAGE SYSTEMS

日本農業遺産

平成29年3月認定

世界農業遺産

平成29年12月認定

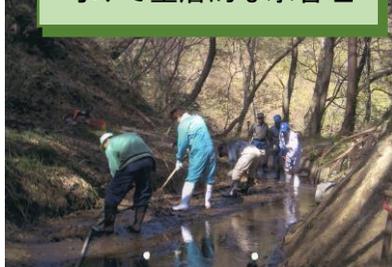
宮城県大崎地域



宮城県大崎市
色麻町
加美町
涌谷町
美里町

宮城県大崎地域は、東北の太平洋側に特有の冷たく湿った季節風の「やませ」による冷害や地形的要因による洪水や渇水を克服するため、水路やため池などの水管理のシステムが発達しています。厳しい農業条件の中で育まれた豊穡を祈る農耕儀礼などの農文化や、「居久根（いぐね）」と呼ばれる屋敷林などの景観が特徴です。

巧みで重層的な水管理



「やませ」による冷害や洪水、渇水が頻発する三重苦の自然条件下で、農家主体の水管理体制によって巧みな水管理がなされてきました。

生物多様性を育む持続可能な水田農業



重要な湿地環境である水田は、生物多様性の保全に貢献し、自然と共生する農業を実現しています。

流域全体に広がる水管理基盤（取水堰、隧道・潜穴、ため池等）

大崎耕土



豊かな農村景観



生活の知恵が詰まった屋敷林「居久根」と水田、水路が織り成す独特の農村景観が形作られています。

農業と結びついた伝統的な農文化



水源地である奥羽山脈の山々への民間信仰、豊穡への祈りや感謝を表す農耕儀礼・民俗芸能、餅食などの郷土食を生み出しました。

世界・日本農業遺産認定による効果

農林水産業の振興

ブランド認証制度による価値の共有と持続的農業の推進

- 豊饒の大地「大崎耕土」世界農業遺産ブランド認証制度による世界農業遺産の保全と活用に向けた価値の明確化
- 認証品の特長や特性をしっかりと伝え、地域内外の消費者の共感を得ることで、販路拡大
- 都市部の住民との交流を通して、互いの顔の見える関係を構築し、消費者と農村コミュニティ、農家が支えあうCSA (Community Supported Agriculture)の実践拡大
- 新規就農者へのフォローアップ、各種支援制度の情報提供や多様な人材との交流を通じて、農業の担い手確保

農業と生物多様性の共生

- 自然共生型農業の拡大による農業生物多様性の保全上の効果を評価し、水田をはじめとする湿地生態系の価値を共有するモニタリング調査手法を普及促進
- 環境負荷の軽減や生物多様性の保全を進めるため、水田の土着性天敵等を活用した有機栽培技術等の普及拡大



▲ブランド認証品カタログ



▲米ブランド認証農家によるモニタリング調査



▲多くの鳥たちでにぎわう水路と水田

- 豊饒の大地「大崎耕土」世界農業遺産ブランド認証件数：-(H28)→407件(R3)→**521件(R4)**
- 6次産業化商品の開発件数：-(H28)→19件(R2)→**7件(R4)**
- 伝統野菜の栽培面積：0.2ha (H28)→0.64ha (R2)→**0.74ha(R4)**
- CSA交流人口：-(H28)→460人(R2)→**846人(R4)**
- 新規就農者数(認定後5年累計)：39名(H28)→194名(R2)→**357名(R4)**
- 農業大学校・農業高校等への世界農業遺産に関する講義：7件(R3)→**36件(R4)**
- 生きものモニタリング手法普及(米ブランド認証農家)：-(H28)→378件(R3)→**443件(R4)**
- 有機JAS認証取得面積：190ha (R2)→185ha(R4)

次世代への継承

知識システムと農耕文化・価値観の継承

- 深水管理や堆肥による土づくり等伝統的な農法と水管理技術継承

- 田んぼダムなどグリーンインフラを活用した取組推進により、自然災害に対する農村防災力向上

未来に伝え、支える人材の育成

- 地域の子供が参加するプログラムを実施することで、農業システムと地域環境を支える人々の営みの価値継承
- 人材育成の推進による農業の知恵の継承と価値の共有

- 栽培技術講習受講者数：-(H28)→2,419人(R2)→**3,186人(R4)**
- 田んぼダム実施面積：357ha (R3)→**892ha(R4)**
- おおさき生きものクラブ参加者数：169人(H28)→280人(R3)→**165人(R4)**
- 語り部育成人数：-(H28)→48人(R3)→**142人(R4)**
- 食文化普及イベント参加者数：588人(R3)→**1,907人(R4)**
- 農耕文化の担い手間の交流機会の創出：-(R2)→**3回(R4)**
- 世界農業遺産「大崎耕土」副読本配布部数：-(H28)→**累計13,000部(R4時点)**



▲現代版巧みな水管理「田んぼダム」



▲おおさき生きものクラブの活動

ランドスケープの保全と活用

フィールドミュージアム構想の推進

- 世界農業遺産認定により明確化された価値を魅力的に発信し、多様な資源を巡るツーリズムを核として交流人口拡大
- 地域が育むストーリーに共感し、「自分ごと」として捉える企業や関係人口を創出



▲「居久根」の保全活動



▲おおさきGIAHS・SDGsパートナー

- 居久根に対する保全支援件数：3件(R3)→**8件(R4)**
- 企業等による居久根保全件数：-(R3)→**2件(R4)**
- GIAHSツーリズム参加者数：-(R3)→**317人(R4)**
- おおさきGIAHS・SDGsパートナー登録件数：-(R3)→**37件(R6)**

大都市近郊に今も息づく 武蔵野の落ち葉堆肥農法



世界農業遺産
令和5年7月認定
日本農業遺産
平成29年3月認定

埼玉県武蔵野地域

武蔵野地域は埼玉県南部
首都東京から30km圏内の大都市近郊
川越市・所沢市ふじみ野市・三芳町の3市
1町からなる地域です。

「武蔵野の落ち葉堆肥農法」は、江戸の食料需給に 대응するための1600年代の江戸時代の本地域の開拓に遡ります。開拓時、栄養分が少なく、水に乏しいなど農業を行うには非常に厳しい自然条件の本地域において、「屋敷地・畑地・平地林」を計画的に配置し、その平地林の落ち葉を堆肥化し、畑地にすき込み土壌改良を行うことによって、生産性が高い畑地を生みだし、安定的な農産物の栽培を可能にしたのが「武蔵野の落ち葉堆肥農法」です。

武蔵野の落ち葉堆肥農法



多福寺

開拓農民の心の拠り所である
菩提寺の多福寺

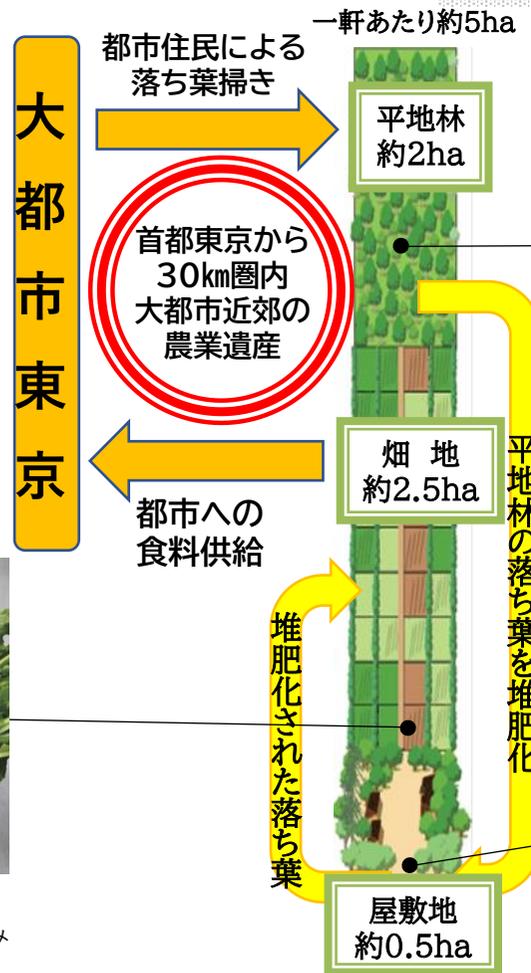
キンラン（絶滅危惧二類）

落ち葉掃きなどの平地林の管理が、
希少な動植物が暮らす環境を生み
出している。



落ち葉堆肥により栽培される多種多様な農産物

落ち葉掃きなどの平地林の管理が、希少な動植物が暮らす環境を生み
出している。



市民参加の落ち葉掃き

冬になると地域内各所で落ち葉堆肥の原料となる
落ち葉掃きが行われる。



平地林から集められた落ち葉は土壌微生物などの力により1～2年かけて堆肥となる。

伝統的農法の維持

実践農業者認定制度の創設

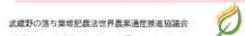
武蔵野落ち葉堆肥農法世界農業遺産推進協議会が伝統的農法である落ち葉堆肥農法を実践している農業者を認定する制度の創設。



実践農業者数 72軒

落ち葉サポーター制度の創設

落ち葉掃きにかかる人手不足を解消するため、多様な主体が気軽に参画できるよう、落ち葉サポーター制度を創設。



落ち葉サポーターを募集します！

日本農業遺産「武蔵野の落ち葉堆肥農法」の維持・発展に貢献する方々を募集します。

あなたも落ち葉サポーターになって、農業遺産の維持に貢献してください。

落ち葉サポーターの募集方法はこちらをご覧ください。

落ち葉サポーターの募集方法はこちらをご覧ください。

落ち葉サポーターの募集方法はこちらをご覧ください。



落ち葉サポーター数 79人

実践農業者補助金制度の創設

実践農業者に対して、ハチホンバサミやクマデなど落ち葉掃きにかかる費用に関して補助金を交付する制度を創設。



ハチホンバサミ



クマデ

実践農業者補助件数 46件

農業遺産の周知

様々な世代に向けて本地域の農法を知っていただくため、親子や小学生を対象とした農業塾を開催。また、農法の魅力を発信する人材を育成するため農業遺産コンシルジュ養成講座を実施。

親子農業塾



小学生対象の農業塾



農業遺産コンシルジュ養成講座

伝統的農法の発信・発展と視察受入施設の整備

2017年からの視察者数 35団体543人

農業遺産拠点施設の整備

映像による農法の紹介や農業遺産のこれまでの歩みの展示。

本地域の平地林を感じられる散歩道の整備と散歩道MAPの作成

農業遺産拠点施設を中心にして、散歩道を整備し、本地域の農法の不可欠の要素である屋敷林・畑地・平地林を直接体感できるようになっている。散歩コースは「人と農の道コース」「平地林コース」「歴史の道コース」の3コースを整備。

中国「宣化のぶどう栽培の都市農業遺産」との『都市型農業遺産「宣化・武蔵野」共同推進宣言』

都市近郊の農業遺産の課題や解決策をお互いに共有し、学術的、農業的及び文化的交流をはじめ多角的な連携を密接に図ることで都市型の農業遺産の重要性を世界に向けて発信し、共に保全活動を推進するために2019年に共同宣言を行った。



峡東地域の扇状地に適応した果樹農業システム

～先人の工夫と努力が育んだ独創的な果樹農業システム～



世界農業遺産

令和4年7月認定

日本農業遺産

平成29年3月認定



山梨県峡東地域



峡東地域は、日本のブドウ栽培発祥の地とされ、ブドウの「甲州」は、平安時代には栽培されていたとも言われています。また、モモ、スモモ、カキなども少なくとも100年以上前から栽培され、江戸時代から果樹の産地として知られていました。扇状地の傾斜地に適応するため、甲州式ブドウ棚と疎植・大木仕立てなどの技術が生み出され、こうした技術を伝承し、匠の技による高品質な果実や加工品を安定的に生産し、収益性の高い農業を確立しています。

伝統的な知識

甲州式ブドウ棚

日本の多雨・湿潤な気候で、ブドウを安定的に生産するために400年以上前に開発された技術。



ワイン醸造や観光利用

ワイン醸造

明治初期には「甲州」などのブドウでワイン醸造を開始し、現在では峡東地域に60軒を超えるワイナリーが存在。

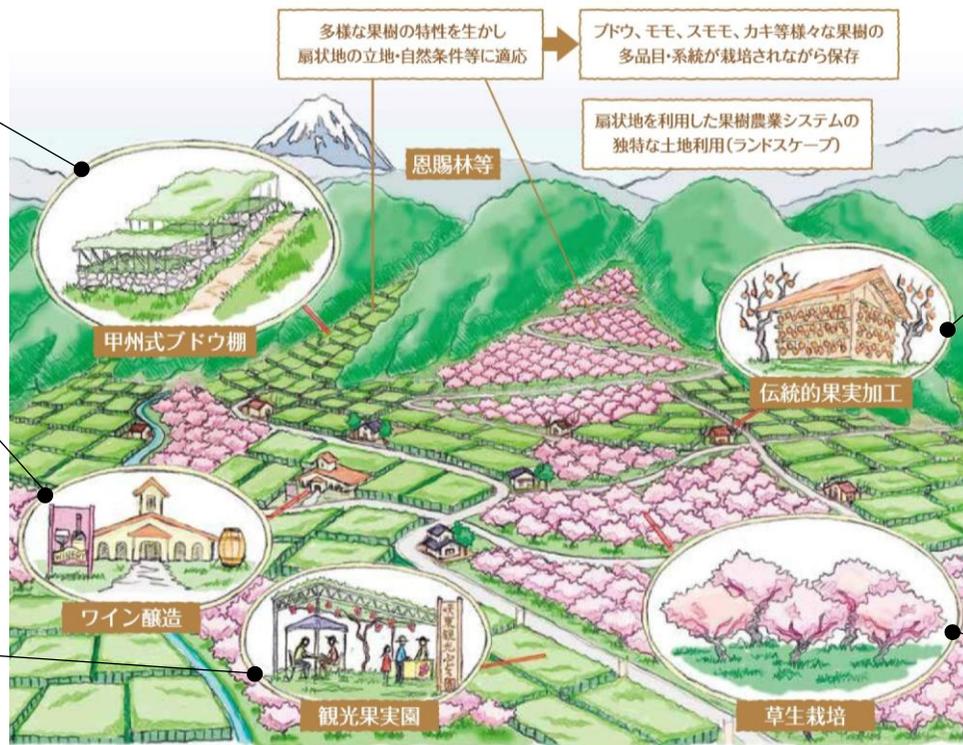


観光果実園

江戸時代に宿場町として栄えた甲州市勝沼町において、往来する旅人に対し、特産のブドウや加工品等を販売したことから始まり、現在では国内外から多数の観光客が来訪。



果樹農業システム



伝統的果実加工



枯露柿の生産

枯露柿は、「甲州百目」と呼ばれる峡東地域の在来品種の渋柿を原料として作られる干し柿で、皮むき、縄がけなど数多くの工程が伝統的な加工技術として継承。

農業生物多様性



自生する草種を利用した草生栽培

傾斜地での雨水による土壌流亡防止や土壌への有機物補給などの効果とともに、植物・昆虫が生育できる多様な環境をつくり、果樹園の生物多様性に寄与。

世界・日本農業遺産認定による効果

食料及び生計の保障

担い手の育成

- ・ 担い手の確保・育成に係る研修(果樹農業技術研修) 898回/年(R5)
- ・ ブランド化の強化、消費拡大
- ・ 消費拡大に向けたPR活動 19回/年(R5)

新たな加工品の開発

- ・ 新たな加工品の開発 累計6件



ベテランによる若手の育成



高品質な果実

農業生物多様性

多様な果樹の栽培

- ・ 多様な果樹の品種・系統の維持 300種以上

草生栽培と生物多様性の維持

- ・ 果樹園での草生栽培の実践

環境に優しい農業の推進

- ・ 環境保全型農業の実践
- ・ GAP認証取得者数 累計75団体



ブドウ 148、モモ 86、
スモモ 45、オウトウ 53、
カキ 13、ウメ、リンゴ、
キウイフルーツ、ナシ、クリ、
ブルーベリーなど

多様な果樹栽培



植物 269種
昆虫 550種

草生栽培が育むたくさんの生き物

地域の伝統的な知識システム

知識システムの伝承

- ・ 果樹農業技術研修 898回/年(R5)
- ・ 甲州式ブドウ棚掛けワークショップの開催
- ・ 農業遺産セミナーの開催 等



農家を対象とした技術研修



棚掛けワークショップ



農業遺産セミナー

文化、価値及び社会組織

子どもたちへの伝承

- ・ 農業遺産副読本の配布、農業体験の促進

若手農業者組織の活動促進

- ・ 若手農業者組織の支援 6組織

多様な主体の参画促進

- ・ 農泊等グリーンツーリズム取組 10取組/年(R5)
- ・ HP、Instagram等による情報発信
- ・ 観光との連携(モニタリングツアー実施等)



副読本の配布



枯露柿作り体験

ランドスケープ

ランドスケープを維持する活動の推進

- ・ 保全活動組織 累計104組織
- ・ 保全活動進捗状況のHPでの公開



春の桃源郷



地域住民による保全活動



ブドウ棚が織りなす風景

静岡水わさびの伝統栽培

— 発祥の地が伝える人とわさびの歴史 —



静岡水わさび

世界農業遺産
平成30年3月認定
日本農業遺産
平成29年3月認定

静岡県わさび栽培地域



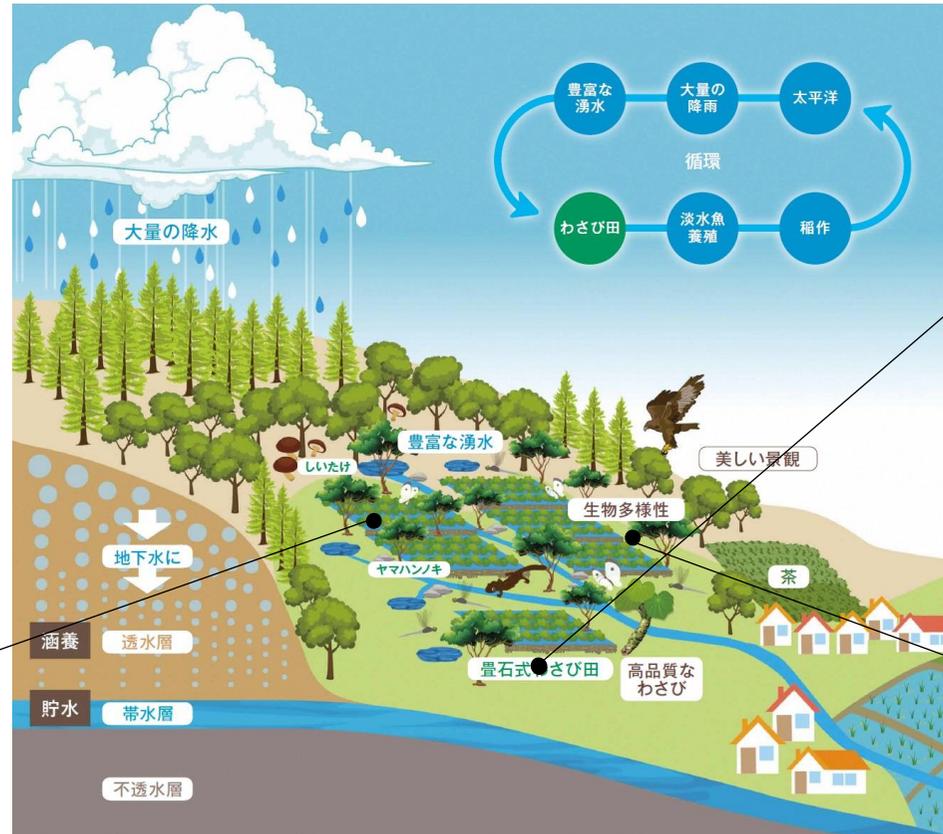
わさび栽培は、今から400年以上に現在の静岡市で始まったとされています。また、1892年頃には現在の伊豆市で、棚田状の階段構造を持つ「畳石式わさび田」と呼ばれる独特な栽培方法を確立しました。日本の固有種であるわさびを、「畳石式わさび田」で農薬や肥料を極力使わず湧水に含まれる養分を利用して栽培する伝統的な農業を継承しています。

和食に欠かせない食材



わさびは日本の固有種です。根茎部分をすりおろすと清涼感のある辛味が生じるため、鮨、刺身、そばなどの薬味として、古くから和食に欠かせない食材となっています。

わさび栽培システム



畳石式わさび田



下層に大きな岩を敷き詰め、上層へ徐々に小さな石を積み上げ、表層には砂礫を敷く複層構造に豊富な水をかけ流すことで、水温の安定と養分や酸素を供給し、一年を通して高品質なわさびを生産することができます。

優れたランドスケープ



わさび田は山間地の森林に溶け込み、四季を通じて優れた景観を生み出します。

生物多様性を育む農法



急峻な地形の山間地であって、水の流れを緩やかにするわさび田は、多くの水生生物が繁殖する場を提供しています。

世界・日本農業遺産認定による効果(取組状況)

継 承

わさび苗の安定供給 担い手の確保

- ・ 県試験研究機関による効率的な苗生産技術の開発、実証普及
- ・ 地元小学校と連携した収穫体験
等校外学習の実施（5件/年）
- ・ 地元小中学生向け教材の制作
- ・ 学校栄養教諭等を対象とした講習会の開催
- ・ 若手生産者に対する築田技術研修会の開催

(R2累計:7回→R5累計:11回)



保 全

生産と景観の両立 地域の保全意識醸成

- ・ 景観に配慮した生産資材の導入検討
(R2累計:3件→R5累計:6件)
- ・ 専門家による生物多様性調査の実施（1回/年）
- ・ 地元農業高校生に対する生物多様性ワークショップの開催
(5件/年)



連 携

企業等との連携 本県産わさびの認知度向上

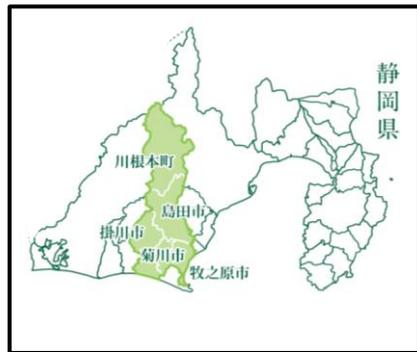
- ・ 協議会ロゴマークの制作
- ・ 「静岡水わさびの逸品」認定制度の創設
(R2累計:72品→R5累計:80品)
- ・ 地元観光事業者やジオガイド等と連携したわさびのPR
- ・ 協議会HPによる情報発信
- ・ 市場関係者への農業遺産PR
- ・ 他認定地域と連携したイベント
出展





静岡の茶草場農法

～豊かな生物多様性を育み
環境と共生する伝統農法～



世界農業遺産

平成25年5月認定

静岡県掛川周辺地域

静岡県掛川周辺地域では、「茶草場(ちゃぐさば)農法」と呼ばれる伝統農法でお茶が栽培されています。毎年秋に草を刈り、有機物として茶園に投入することで、茶草場を様々な動植物が生育する特別な場所に変えてきました。高品質な茶づくりを目指す農家の努力により生物多様性が保全・継承されています。

茶草場農法の工程

草刈り

秋から冬にかけてススキやササ等の茶草を刈り取ります。



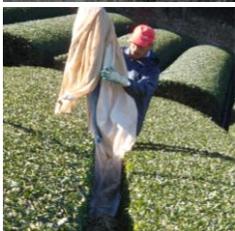
草の乾燥

刈った草を束ねて乾燥させます。束ねた草は「かっぱし」と呼ばれています。



茶園へ投入

乾燥させた草を細断し、茶園へ投入します。



高品質なお茶づくりが守る生物多様性



高品質なお茶づくり

よりよいお茶づくりのために

茶草場農法の技術は高品質なお茶を生産しようとする農家の努力により継承されています。



生物多様性の保全

草刈り後の茶草場

草を刈り取られた後は地表まで日の光がよく当たり、様々な生物が生育しやすい環境になります。



カケガワフキバッタ

静岡県掛川市の地名を冠した固有種で、翅が退化して成虫になっても飛ぶことのできないバッタです。



世界農業遺産認定後の取組

茶草場農法実践者認定制度

◆「静岡の茶草場農法」実践者認定制度を2013年9月に創設した。この制度では、茶園経営面積に対する茶草場の管理面積に応じ、生物多様性保全貢献度を3段階に区別して農法実践者を認定しており、お茶の葉の数で表している。

茶草場管理面積/茶園経営面積の割合	
認定区分	認定表示
5%未満	なし
5～25%未満	
25～50%未満	
50%以上	

茶園経営面積に対する茶草場の管理面積に応じ、

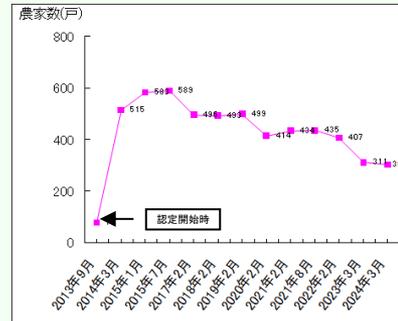
3ランクの認定



認定実績(2025年3月末時点)
 認定戸数 298戸
 認定シール累計販売数 863万枚
 登録販売業者 160社

◆下のグラフは茶草場農法実践者認定制度を2013年9月に開始してからの実践農業者等の推移を表したものである。制度開始以降、認定を受けた実践農業者及び茶草場面積は以下のとおり。

認定農業者数の推移



認定茶草場面積の推移



応援ロゴマークの作成

◆応募総数304作品から選定したロゴマークを2017年に公表した。茶製品のみならず、幅広い製品に使用することができる。延べ申請件数は47件(2025年3月末時点)



モデルツアー・バスツアーの実施

◆認定地域の魅力発信及び活性化のため、地域の実情にあったモデルツアーの実施支援及び協議会を主体とした体験バスツアーを行っている。



公式HP・SNSでの情報発信

◆公式ホームページ(日本語・英語)を開設し、情報発信力を高めるとともに、SNSの活用による双方向の情報発信を実施している。



～この他、生物多様性の保全、茶文化の普及等様々な活動に取り組んでいます。～

トキと共生する佐渡の里山

～トキの舞う里を未来へ受け継ぎたい～



世界農業遺産

平成23年6月認定

新潟県佐渡市

トキとの共生を目指し、田んぼの生態系に配慮した「生きものを育む農法」の取り組みや棚田などの美しい景観、昔から受け継がれている伝統的な農文化が評価され、世界農業遺産に認定されています。この佐渡の農業や豊かな環境を守り、次の世代に継承していくことを目指して整備を進めます。



伝承された水稻農業



「佐渡島の金山」の繁栄により海沿いから山深くまで開発された美しい棚田風景。島内各地で現在も稲作が行われています。

受継がれる伝統文化



農業の儀式から様々な伝統文化的習慣が発展し、現在も継承されています。鬼太鼓は約120集落、能舞台は34棟が現存しています。

トキと共生する佐渡の里山



トキと共生する農業



生きものの生息環境を田んぼの中に作り出し、トキの餌場を確保する「生きものを育む農法」が広く行われています。
(写真：江（深み）の設置)



「生きものを育む農法」などを行った田んぼを佐渡市が認証します。そこで育ったお米は「朱鷺と暮らす郷」という名称で高付加価値販売されています。

世界(又は日本)農業遺産認定による効果

農林水産業

認証米のブランド力向上と販路拡大

- 朱鷺と暮らす郷づくり認証制度のブランド力向上のため、要件の検討、PRイベントの実施、普及啓発活動を展開
- 販路拡大のため、米穀専門店を中心とした営業活動のほか、佐渡産品を取扱う「サドメシラン」の普及拡大活動を展開



- 朱鷺と暮らす郷認証農家数 : 256戸 (H20) → **366戸** (R5)
- 朱鷺と暮らす郷認証面積 : 426ha (H20) → **1,140ha** (R5)
- 農業法人等組織化数 : 28団体 (H23) → **58団体** (R5)
- 新規就農者数 : 14名 (H24) → **延べ189名** (R5)
- 朱鷺と暮らす郷販売米穀専門店の店舗数 : 150店舗 (H23) → **255店舗** (R5)
- サドメシラン店舗数 : 18店舗 (H26) → **124店舗** (R5)

観光

『トキと共生する里山』を巡る交流人口の増加

- 国内で初めて世界農業遺産に認定された島の農業システムを確認に訪れる交流人口の拡大に向け、PRイベントの実施、ツアーの造成、ブランドマークの開発、田んぼアートの実施
- 島で幅広く活動する「地域おこし協力隊」の多くが、任期を終えた後も島に残って暮らしている



▲田んぼアートの実施

- 世界農業遺産の認知度(島内) : - (H25) → **70.7%** (R3)
- トキの森公園来場数 (H23から累計) : 3,107,367人 (H23) → **4,767,615人** (R5)
- 佐渡棚田協議会の会員数 : 17人 (H24) → **79人** (R5)
- 佐渡市世界農業遺産ブランドマーク申請件数 (延べ) : - (H23) → **126件** (R5)
- 田んぼアートイベント (田植え・稲刈り) 参加人数 : - (H23) → **約220人** (R5)
- 地域おこし協力隊採用人数 (延べ)、定着率 : 4人 (H24) → **48人** (R3) 定着率 **62.2%** (R5)

次世代への継承

農文化で育まれた伝統芸能の継承

- 国内の3分の1ともいわれる能舞台が現存し演能が行われるほか、五穀豊穰などを願いながら継承してきた伝統芸能が残っている



▲伝統芸能「鬼太鼓」

- 能舞台現存数 : 35棟 (H23) → **34棟** (R5)
- 鬼太鼓保存件数 : 約120件 (H23) → **約120件** (R5)

子どもたちへの環境教育、食育教育

- 身近な田んぼや川など、見慣れた風景が守られてきた仕組みや取組みを学ぶ教育活動を推進するとともに、給食に地場産品を使った食育から農業を学ぶ取組みが進んでいる

- 環境教育(トキ)を取り入れている島内中学校 : - (H23) → **13校** (R5)
- 佐渡Kids生きもの調査隊の隊員数 : - (H23) → **26人** (R5)
- 島内小中学校給食における認証米使用率(米粉含む) : - (H23) → **100%** (R5)

生物多様性の推進

生物多様性を支える仕組みや取組み

- トキと人が共生できる里山環境を保全・再生するため、トキをシンボルとした多くの生きものが棲む安全・安心な農法を追求



▲年に2回実施する「生きもの調査」

- 生きものを育む農法、生きもの調査といった取組みが浸透し、トキのエサ場となる生物多様性豊かな田んぼが保たれ、野性下のトキ個体数が増加している

- 野生下のトキの個体数(推定) : 49羽 (H23) → **532羽** (R5)
- トキ環境整備指定寄附金額 (H23から累計) : 7,668千円 (H23) → **95,304千円** (R5)
- トキファンクラブ会員数 (H23年から累計) : 4,181名 (H23) → **8,801名** (R5)
- 生物多様性の認知度 : - (H23) → **81.7%** (R3)

能登の里山里海



世界農業遺産

平成23年6月認定



石川県能登地域

「能登の里山里海」は、農林水産業とそれに関わる人々の営みの中で守り伝えられてきた祭礼や伝統技術、美しい景観、豊かな生きものつながりなど、能登の暮らしそのものです。

優れた里山景観

日本海に面した急傾斜地に広がる棚田や「間垣」と呼ばれる竹の垣根、茅葺きや白壁・黒瓦の家並みなどが広がっています。



伝えたい伝統的な技術

日本で能登に唯一残る「揚げ浜式」と呼ばれる製塩法や、「輪島塗」といった伝統工芸、「炭焼き」などの伝統的な技術が継承されています。



文化・祭礼

ユネスコ無形文化遺産に登録された「あえのこと」をはじめ、農林水産業と結び付いた文化・祭礼が伝承されています。



里山里海の利用保全活動

棚田のオーナー制度や農家民宿、農林水産物のブランド化、行政と大学が連携した人材育成などが進められています。

伝統的な農林漁法と土地利用

稲のはぎ干し(天日干し)や海女漁などの伝統的な農林漁法が継承されています。また、干を超える「ため池」が点在し、傾斜地には多くの棚田が見られます。

世界農業遺産認定による効果

伝統的な農林水産業の継承

「能登の里山里海」の次世代への継承

- 地域内の高校生が、地域の農林水産業を支えてきた「地域の名人」を訪ね、その知恵や工夫、思いを聞き取りまとめる「聞き書き研修」を平成24年度から実施。高校生からは、「名人のように社会に貢献できるような人になりたい」、「地域に対する見方が変わった」などの意見が聞かれた。



- 令和元年度からは、「聞き書き研修」をさらに発展させ、「能登の里山里海」の生業を高校生に体験してもらい、地域の魅力の再発見や定住のきっかけをつくる取組を実施し、動画で紹介。【https://noto-giahs.jp/gal_movie.html】

- 地域内の小学生(高学年)を対象に、身近な存在である「能登の里山里海」をより理解してもらうため、副読本教材を作成し配布。



- 石川県内の大学生を対象に、能登をフィールドワークの場所として、地域振興の実践例を学び、能登への理解を深める「いしかわり山塾」を平成30年度から開催。参加した大学生は、自らの経験を活かして小学生に対して出前授業を実施。

- 高校生対象プログラム(聞き書き含む)への参加人数: 累計252人参加(R1~R5)
- 聞き書き研修(~H30)を受け入れた地域の名人の人数: 累計73人参加
- 里山塾に参加した小学生の人数: 累計564人参加(H30~R5)

観光産業との連携

地域資源を活用した観光産業の推進

- 「能登の里山里海」の地域資源を活用した、イベントやツアーなどを実施。

【白米千枚田でのイベント】

「能登の里山里海」を代表する棚田となっている「白米千枚田」では、「あぜのきらめき」や「稲刈りイベント」などが実施され、観光客は着実に増加。



「あぜのきらめき」などのイベントを実施。

農林水産業の振興

農林水産物の付加価値向上と生産振興

- 「能登の里山里海」で磨かれた選りすぐりの食品を、世界農業遺産 未来につなげる「能登の一品」として認定。(令和6年3月現在43品が認定)

認定商品には
ロゴマーク
をつけてPR



【認定商品販売額】
認定前に比べ
約30%増
(認定商品の平均)
※令和元年度実績



能登大納言小豆 奥能登揚げ浜塩

- 地元企業と連携して、「いしかわり山振興ファンド」を創設。里山里海の地域資源を活用した商品・サービスの開発等に取り組む地域住民や企業等を支援



- 地元金融機関と連携して、「いしかわ農業参入支援ファンド」を創設し、耕作放棄地の解消を目指す経営体の営農定着のために5年間支援。平成26年7月に設置され、(公財)いしかわ農業総合支援機構が運営。基金総額は200億円。

- 世界農業遺産 未来につなげる「能登の一品」の認定数: - (H23)→**43品**(R5年度末)
- いしかわり山振興ファンドの採択件数: 11件 (H23)→**23件**(R5) 累計203件採択
- 世界農業遺産認定後の能登の農業参入企業等の数: **41社**(R5年度末)

【世界農業遺産スタディツアー】

都市部の住民を対象に、平成23年度より、企業とタイアップして「世界農業遺産スタディツアー」を実施。ツアーの参加者は、世界農業遺産を学び、「能登の里山里海」の多彩な魅力を体験。



- 世界農業遺産スタディツアーの開催回数: 2回/年(H23)→**2回/年**(R5) 累計40回開催
- 世界農業遺産スタディツアーの参加者数: 55人(H23)→**59人**(R5) 累計1,407人参加
- 白米千枚田への来客数: 420,600人/年(H23)→**451,100人/年**(R4)

清流長良川の鮎

～里川における人と鮎のつながり～



世界農業遺産

平成27年12月認定

岐阜県長良川上中流域



86万人もの流域の人々のくらしの中で清流が保たれている長良川。そんな長良川の澄んだ水の中で育つ「鮎」は、流域の食や伝統文化、歴史、経済と深く結びつき、長良川の豊かさをあらわす象徴といわれています。鮎を通じて見えてくる人の生活、水環境、漁業資源が相互に深く関わり循環する仕組みは、「里川システム」と呼べるものです。

長良川のシンボル「鮎」



水が澄んだ長良川では豊富に育った藻類が水をきれいにします。それを「鮎」が食べることで、次々に新しい藻類が育ち、水を綺麗にし続ける循環が生まれています。

「鵜」を操る伝統漁法 鵜飼



鵜飼では、鵜匠が魚を丸呑みする習性のある水鳥の「鵜」を紐で操り、船上で鮎を吐き出させ捕えます。



日本有数の鮎

伝統漁法による食料の確保

鮎と水の文化

流域に伝わる文化と価値観



森が蓄える長良川の清流

都市部を流れる川でありながら日本三大清流と呼ばれる



森を育てる活動

森林の育成と水資源管理



川を守る活動

優れた景観と生態系の保全

長良川システム

人の生活、水環境、漁業資源が連環する里川のシステム

森・川・海のつながりで育つ鮎

生物多様性と鮎資源の確保



世界農業遺産認定による効果

農林水産業

「里川」における持続的な農林水産業の振興

- ・「岐阜県魚苗センター」の拡充
- ・人工ふ化放流事業、繁殖環境整備
- ・7月第4日曜日を「GIAHS鮎の日」に制定
- ・「清流長良川の鮎」ロゴマークの制定
- ・「清流長良川の恵みの逸品」の制定
- ・海外トップセールスでのプロモーション

- 放流用鮎種苗生産能力: 60t (H25)→72t (R6)
- 産卵場造成面積: 800m² (H25)→1,600m² (R6)
- 「清流長良川の恵みの逸品」認定商品数: 62商品 (R6)
- 「清流の国ぎふ」鮎を食べよう! キャンペーンの開催
- 県産鮎輸出货量: 15kg (H25)→3,540kg (R4)



GIAHS鮎の日



2016年7月24日 ロゴマーク表彰式
応募296点(県内212点、県外84点)

伝統漁法、伝統文化

鮎を対象とした伝統漁法と、
鮎と水にまつわる伝統文化の継承

- ・ 伝統漁法、文化を守る後継者の育成
- ・ 「清流長良川あゆパーク」の新設

- 伝統漁法等の体験学習を実施する漁業協同組合数: 8組合 (R5)
- 体験学習を通じた水産業の振興と世界農業遺産「清流長良川の鮎」の情報発信拠点、清流長良川あゆパークオープン: H30.6.2
- 清流長良川あゆパーク来場者: 90万人 (R6.9)



清流長良川あゆパーク



伝統漁法を親子で学ぶ講座

環境の維持、保全

「里川」における水環境、生物多様性の維持、保全

- ・水源の森づくり、魚のための森づくり
- ・良質な水質の保全
- ・生物多様性の維持、保全

- 「清流長良川の鮎」プレーヤーズ: 95団体 (R5)
- 漁協の「長良川源流の森育成事業」: 130名参加 (R6)
- 「長良川源流の森育成事業取組面積」: 4.9ha (H25)→11.52ha (R6)
- 魚付き保安林面積: 4.5ha (H25)→16.8ha (R5)
- 生物多様性シンポジウムの開催: R6.3.23
- フィッシュウェイサポーターによる魚道点検: 250箇所 (R5)
- 特定外来生物コクチバスの駆除:

電気ショックボート3隻 (R6)



コクチバスの駆除



長良川源流の森育成事業

景観の保全、継承

「里川」における景観と
伝統的防災システムの保全・継承

- ・農村景観の保全、継承
- ・歴史ある町並みを保全、継承
- ・伝統的防災システムの保全、継承

- ぎふ・リバーサポーター活動団体数: 166団体 (R5)
- 岐阜県、愛知県、三重県、静岡県内の18都市が連携して「歴まちカード」を発行、魅力を啓発(岐阜市川原町、美濃市美濃町、郡上市八幡町): カード配布数13,000枚 (R5)
- 伝統的防災施設に関する出前講座などを実施



うだつの上がる町並み(美濃市)



長良川の霞堤

情報発信

国内外に向けた長良川システムの発信

- ・国内認定地域との連携PR
- ・民間団体によるPR活動
- ・冊子・チラシ等によるPR
- ・「東南アジア漁業開発センター」との協力
- ・「内水面漁業研修センター」開設
- ・研修生受け入れ、研究員派遣による技術指導
- ・国際貢献活動の国内外でのPR

- 石川県、滋賀県との連携PR: 4回 (R5)
- 副読本・まんが副読本配布数: 7,435部 (R5)
- アジア、アフリカ地域等からの研修生や政府関係者の視察研修受け入れ: 2回 (R5)
- 東アジア農業遺産学会 (ERAHS) の岐阜県での開催: R6.8.8~9



東アジア農業遺産学会 (ERAHS) 開催



内水面漁業研修センターでの研修

森・里・湖に育まれる 漁業と農業が織りなす 琵琶湖システム

うみ



世界農業遺産
令和4年7月認定
日本農業遺産
平成31年2月認定

滋賀県琵琶湖地域

多くの在来魚が生息する琵琶湖では、湖辺の水田に湖魚が遡上し、人は農作業の傍ら湖魚を捕獲する待ち受け型の漁法を発展させてきました。漁法の代表格はエリ漁であり、水産資源の保全に配慮する社会的な仕組みとともに、現代に受け継がれてきています。また、多様な主体による水源林の保全や、琵琶湖の環境に配慮した農業など、水質や生態系を守る人々の取組、森・里・湖のつながりは、世界的に貴重なものです。

滋賀県
全市町



伝統的な「待ちの漁法」



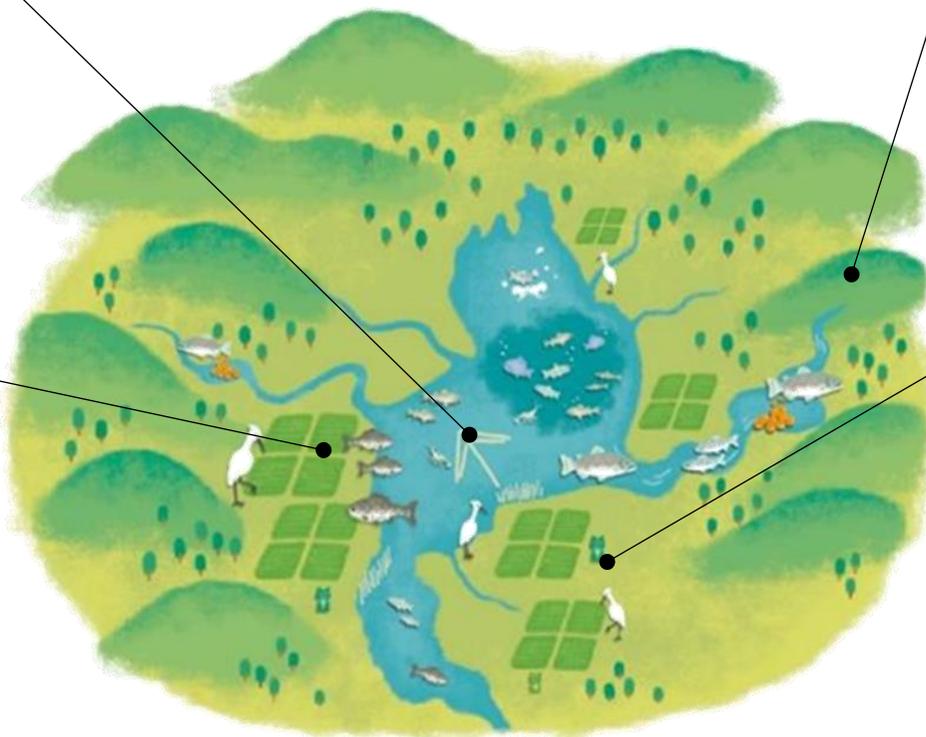
千年以上の歴史を持つエリ漁は琵琶湖を代表する漁法であり、ツボと呼ばれる部分に入ってきた魚を必要な量だけ漁獲します。

魚のゆりかご水田、 環境こだわり農業



湖魚に安全な繁殖の場を提供する「魚のゆりかご水田」の取組や、化学合成農薬・化学肥料を減らす「環境こだわり農業」を実践しています。

森・里・湖に育まれる 漁業と農業が織りなす 琵琶湖システム



水源林の保全



山に木を植えて育てることが洪水や濁水を防ぐことに役立つほか、河川を利用する魚たちを守ることもつながります。

伝統的な食文化と祭り



湖魚をご飯に漬け込んで発酵させる保存食「なれずし」は、贈り物や神社のお供え物にも使われてきました。

世界・日本農業遺産認定による効果

農林水産業

オーガニックの拡大による「環境こだわり農業」の深化

- ・作りやすく安定生産が可能な水稻新品種「きらみずき」を開発したほか、オーガニック栽培の安定生産技術の普及や指導者の育成、有機JAS認証の取得支援などを実施

- オーガニック米等栽培面積：
146 ha (H29) → 291 ha (R5)

協働による森林づくり

- ・R4全国植樹祭を契機とした森林づくりの機運醸成や「やまの健康推進プロジェクト」の推進等による企業・団体等への積極的なPRを実施

- 活動をPRする森林づくり団体数(県内累計)：
80団体(H28) → 157団体(R5)



「きらみずき」のパッケージ



令和4年全国植樹祭

次世代への継承

「琵琶湖システム」出前講座の実施

- ・「琵琶湖システム」を次世代に継承するため、学校を中心に、企業や団体等への出前講座を実施

- 出前講座の実施回数:0回(H28) → 36回(R5)

子どもたちへの理解促進

- ・県内小学生を対象に「琵琶湖システム」の主要な構成要素を体験する学習プログラムを実施。ほぼ全ての学校で取組が継続

- 実施学校数：
うみのこ 237校(H28) → 232校(R5)
やまのこ 235校(H28) → 231校(R5)
たんぼのこ 203校(H28) → 201校(R5)



小学校での出前講座



学習船「うみのこ」

観光

農山漁村におけるエコツーリズム・グリーンツーリズムの推進

- ・農家を対象に研修会を実施し、農泊推進に関する講演を行うほか、ホームページ「グリーンツーリズム滋賀」にコンテンツを掲載。また、県の観光施策「シガリズム」においても琵琶湖システムの体験コンテンツを紹介

- 都市農村交流施設登録数：
0件(H28) → 98件(R5)



ホームページ「グリーンツーリズム」

地域資源の持続可能な活用・保全を促進するための観光産業との連携

- ・観光関連事業者との連携により、世界農業遺産を感じられるコンテンツの創出やPRに取り組むとともに、ビワイチ※を通して周遊観光を促進

※琵琶湖および県内観光地を自転車で周遊すること



ビワイチの
ロゴマーク

生物多様性の推進

多様な主体が連携する「魚のゆりかご水田プロジェクト」の取組拡大

- ・推進団体として「琵琶湖とつながる生きものたんぼ物語推進協議会」を組織。また、関心のある稲作経営者等に声掛けし、交流会を開催

- 「魚のゆりかご水田」の認証組織数：
6組織(H28) → 18組織(R5)



生きものが賑わう魚のゆりかご水田

外来魚駆除

- ・効率的な駆除に取り組むための外来魚駆除対策検討会を開催。また、県と滋賀県漁業協同組合連合会が連携し、漁業者による外来魚駆除を進めるとともに、釣り人による外来魚駆除も実施

- 外来魚生息量:1,131トン(H28) → 370トン(R5)



刺網による外来魚駆除

人と牛が共生する 美方地域の 伝統的但馬牛飼育システム



世界農業遺産
兵庫美方地域

世界農業遺産
令和5年7月認定
日本農業遺産
平成31年2月認定

兵庫県兵庫美方地域

全国に先駆けて牛籍簿を整備し、地域内の血統にこだわった和牛改良を行うことで、独自の遺伝資源が保全されてきました。但馬牛の飼養は、地域の草原や棚田の維持、農村文化の継承にも貢献しています。

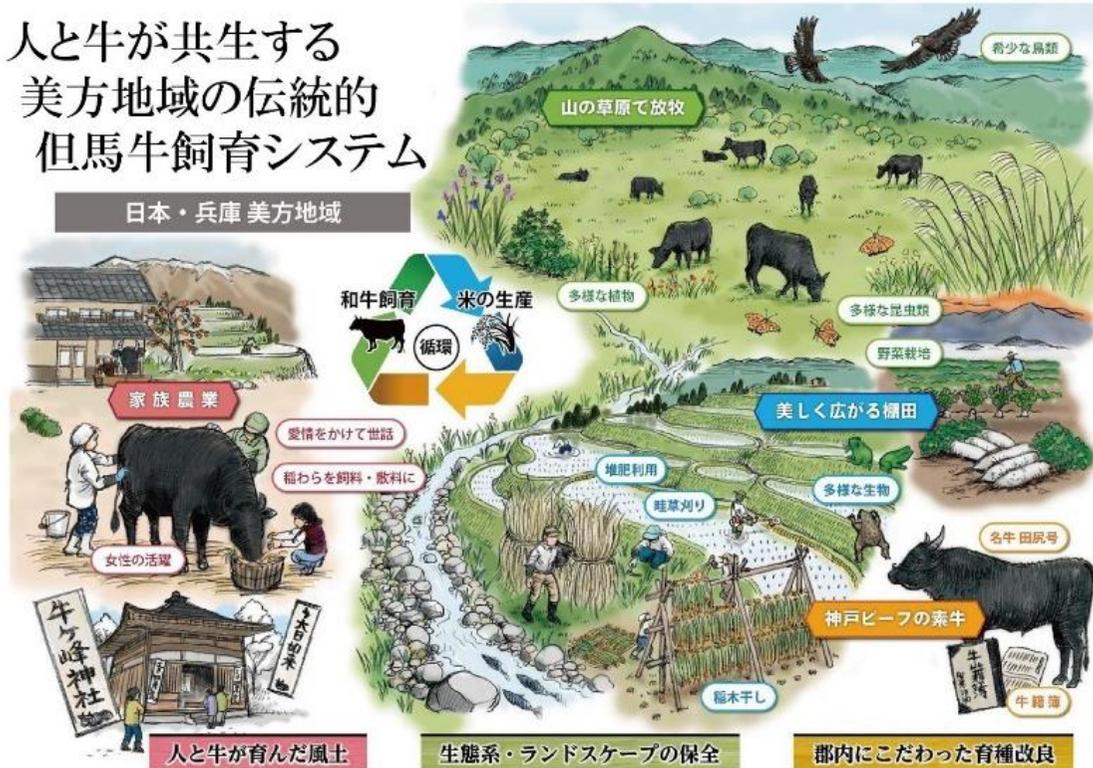
山深い地域



山深い地形の美方地域は、昼夜の寒暖差が大きく、夜露が頻繁に発生するため、夏でも良質な草が育ちます。

人と牛が共生する 美方地域の伝統的 但馬牛飼育システム

日本・兵庫 美方地域



優良牛保存システム



遺伝の法則を知らなかった時代から、良い母牛がよい娘牛を生むことに着目し「蔓牛(つるうし)」という血統集団が谷ごとに作られました。明治31年には各村役場に牛の戸籍である「牛籍簿」が作られました。これは和牛登録システムの元祖となっています。

牛は家族



但馬牛を家族のように大切にしてきました。現在も変わらず1頭1頭大切に飼育されています。

世界・日本農業遺産認定による効果

但馬牛の生産振興

但馬牛を中心とする生業の維持発展

- 子牛生産数及び子牛市場上場頭数を増加させ、「神戸ビーフ(但馬牛)」の供給量を増加し、但馬牛のブランド力を更に向上

- 繁殖牛頭数 : 2,218頭(R2) → 2,229頭(R4)
- 肥育牛頭数 : 934頭(R2) → 1,075頭(R4)
- 認定農業者数: 33名(R4) → 33名(R5)

地産地消

- 新たな肥育農家数: 2名(R4) → 2名(R5)

遺伝的多様性の維持、希少系統の維持

- 近交係数: 25.7%(R4) → 26.0%(R5)
- 熊波系育種基礎雌牛認定頭数: 87頭(R2) → 110頭(R5)



但馬牛の放牧

次世代への技術継承

次の世代へと受け継がれていく持続的な地域のシステム

- 世界的に特色のある遺伝資源を守り、地域の農地、農村環境、草原、多種多様な生物資源を保全

- 研修会の開催回数:
3回(R4) → 5回(R5)
- 子牛品評会、共進会の開催回数:
4回(R4) → 4回(R5)



但馬牛の測定

観光

但馬牛への理解の醸成と交流の推進

- 但馬牛誕生の歴史や但馬牛文化を広く発信し、地域での価値観を向上させるとともに、精肉販売やレストランでのメニュー提供により但馬牛の魅力を発信

- 但馬牧場公園入場者数: 89,794人(R4) → 92,377人(R5)
- 道の駅利用者数: 157,440人(R4) → 158,370人(R5)
- 観光入込数: 1,622千人(R2) → 1,863千人(R5)



但馬牛の調理



但馬ビーフ(JAたじま提供)

環境創造型農業の普及

「人と環境にやさしい農業」の普及

- 地球環境や生物多様性に配慮した「人と環境にやさしい農業」を普及し、安全で高品質な農産物を生産する環境創造型農業を推進し、良質な食料の持続的な生産を推進

栽培面積

- かこのほほえみ米: 4.5ha(R2) → 6.1ha(R5)
- みかた棚田米: 155.7ha(R2) → 157.0ha(R5)
- コウノトリ育むお米: 8.5ha(R2) → 8.7ha(R4)



堆肥散布



コウノトリが飛来した田
(JAたじま提供)

みなべ・田辺の梅システム



画像提供：田辺市観光振興課



世界農業遺産
平成27年12月認定



みなべ町
田辺市

和歌山県みなべ・田辺地域

みなべ・田辺地域は、その土地を養分の乏しい礫質の斜面が占めており、斜面にウバメガシなどの薪炭林を残しつつ梅林を開墾して、高品質な梅を生産しています。薪炭林は水源涵養や崩落防止等の機能を保持するとともに、ウバメガシからは堅くて良質な「紀州備長炭」が生産されています。

紀州備長炭の薪炭林



炭焼き職人がウバメガシやカシを択伐（たくばつ）することで、山が荒れるのを防いでいます。

里山が育み、人がつなぐ日本一の梅づくり



ミツバチと梅の共生



梅の多くは自家受粉できないため、他の品種を近くに植え、受粉にはニホンミツバチが利用されます。

高品質の南高梅を生む技術



地域の多くの梅生産農家は、収穫した梅を白干しにする一次加工まで実施。その後、加工業者が脱塩・調味などの工程を加えて商品化しています。この「地域の生産者と加工業者との連携」が本地域の南高梅というトップブランドを生み出しています。

多様な生態系の維持



梅林や薪炭林にはオオタカ、ため池や水田にはアカハライモリなどの希少種が確認されています。

世界農業遺産認定による効果

梅・紀州備長炭の生産振興

梅と備長炭を中心とする生業の維持発展

- みなべ町・田辺市で生産される南高梅、紀州備長炭は日本の最高級(トップブランド)
- みなべ町・田辺市の農家の9割以上が梅を栽培し、梅干し等の二次加工業の企業が地域内に集積。製炭も山間部の産業として大きな存在であり、梅と備長炭に関わる人々の生業が地域全体に拡大



▲南高梅



▲紀州備長炭

- 梅栽培面積 : 4,060ha (H22) → 4,190ha (R3)
- 梅生産量 : 44,000t (H24) → 58,100t (R3)
- 梅新品種普及面積: 81ha (H25) → 217ha (R4)
- 山管理技術講習会参加: 30人 (H25) → 78人 (R2~3)

将来を見据えた次世代への継承

伝統技術の継承と後継者育成

- 生産者の姿、ランドスケープ、生物多様性、伝統技法、伝統文化などを伝承していくため、学びの機会を広く提供

- 教育機関と連携した梅システムマイスターの養成: 9人 (H29) → 累計44人 (R3)

- みなべ・田辺地域を支える人材の確保と育成、多様な主体が参画する仕組みづくりと受入体制の充実

- 教育機関での食育学習会: 48回 (H25) → 212回 (R4)



▲紀州備長炭窯出し体験



▲教育機関での食育学習及びイベント

観光体験の充実

「みなべ田辺の梅システム」が支える本地域の魅力アップ

- 観梅・梅干工場見学・観光炭焼き体験・伝統行事など観光体験と地域への滞在。システムを説明できる場所・人材を充実
- 官民地域連携で取り組む梅収穫ワーケーション®、都市農村交流による協働活動で関係人口を創出し地域を活性化

- うめ・炭情報発信施設の来館者: 53,999人/年 (H25) → 60,678人/年 (R4)
- みなべ梅林入場者数: 24,649人 (H28) → 30,025人 (R4)



▲紀州田辺石神梅林
画像提供: 田辺市観光振興課



▲梅収穫ワーケーション®
画像提供: 一般社団法人日本ウェルビーイング推進協議会

梅システムの国際的な貢献

「みなべ田辺の梅システム」の国内企業や諸外国へ向けた情報発信

- 世界農業遺産認定地域や諸外国との連携した情報共有、交流を進展

- ロゴマークを活用する企業数: 18社 (H28) → 累計119社 (R5)
- イベント・プロモーション参加: 4件 (H27) → 16件 (R5)

- 世界的な重要性を発信するとともに新たな認定を目指す途上国を支援

- 海外研修生: 28人 (H28) → 累計133人 (R5)
- 受入国数: 2カ国 (H28) → 累計14カ国 (R5)



▲世界農業遺産認定地域間交流イベント



▲海外研修生の受入



にし阿波の 傾斜地農耕システム



世界農業遺産
平成30年3月認定
日本農業遺産
平成29年3月認定

徳島県にし阿波地域

にし阿波地域の山間部に点在している集落は、いずれも急峻な傾斜地に位置し、場所によっては斜度40度にも及びます。この傾斜地を段々畑のような平らな面に造成するのではなく、傾斜地のまま農耕を行ってきました。これにより培われた独自の技と知恵によって、景観や食文化、生態系、農耕にまつわる伝統行事等が守られ、400年以上にわたり継承されています。

食と暮らしを支える



縄文時代からの歴史がある雑穀文化は、現在でも日々の暮らしに役立てられています。

風土に根付いた文化



ユネスコ無形文化遺産（風流踊の一つ）に登録されている西祖谷の神代踊やお亥の子さん等の農業催事といった伝統行事が受け継がれています。

人と環境が 調和した景観



傾斜地で農耕生活が営まれることで、にし阿波ならではの景観が生まれています。

傾斜地農耕システム



伝統と自然を守る



にし阿波の傾斜地農耕システムを象徴するコエグロは採取したカヤを円錐状に積み上げて乾燥させたものです。カヤは肥やしになり、土砂の流出も防ぐ等、農耕に役立っています。

生物と植物の宝庫



種子が保存されてきたため、雑穀や野菜は原種に近い希少なものとなっています。カヤ場は人の手によって生物多様性が保たれているため、希少な植物や昆虫等、多種多様な動植物が生息しています。

世界・日本農業遺産認定による効果と取組

持続可能なにし阿波農業

農産物・加工品のブランド化

「にし阿波の傾斜地農耕システム」で生産された農産物とそれを用いた加工品を認証し、ブランド化による農家の所得向上や傾斜地農法の継承を図っている。



- ブランド認証件数：107件（R6年8月時点 ※R1年度より開始）

体験型教育旅行の推進

農泊施設を対象に、本地域ならではの農業遺産体験メニューの造成や宿泊サービス向上に向けた受入体制を支援し、都市住民との交流拡大と農業遺産の付加価値向上を図っている。

- 体験型教育旅行（年間）：3,319人泊（R1）→7,014人泊（R5）

関心層に響く情報発信

SNSを活用した認知度の向上

公式HP、Instagram、YouTubeに傾斜地集落の暮らし等の写真と紹介記事を随時投稿し、国内外へ広く情報発信している。



- 公式Instagramのフォロワー数及び投稿数：1,944人、1,251回（R6年9月時点 ※R1年度より開始）

ツアーや視察受入による認知度の向上

農業遺産の認知度を高めるため、傾斜地農耕システムを学び、体感できるスタディーツアーの実施や視察の受入を行っている。

- 視察件数（年間）：15件（H30）→22件（R5）

GIAHSポイントの認定

傾斜地農耕システムを象徴する地点をGIAHSポイントに認定し、国内外へ発信することで、認知度の向上と観光誘客へ繋げている。

- 認定数（延べ）：7件（R6年8月時点 ※R5年度より開始）

担い手づくりと啓発

児童・学生へのSDGs教育

「にし阿波の傾斜地農耕システム」を体系的に地域の学校で教えることにより、地域に愛着と誇りを持った次代を担う人材を育成している。



- 出前授業及び体験学習の件数（年間）：11件（R1）→41件（R5）

農文化、食文化の継承

本地域の傾斜地農耕や伝統料理等に卓越し、食と農の分野で活躍している者を、「徳島・にし阿波 食と農の名人」として認定し、「名人」が有する知識・経験・技術等を次世代に継承するための活動を支援している。

- 徳島・にし阿波 食と農の名人認定数：35人（R5 ※H29年度より開始）

生物多様性・集落の保全

採草地・集落景観の適切な管理

これまで実施した生物多様性調査によって、カヤ場には、希少な動植物が生息していることを確認。自然環境に人の手が入ることで、生物多様性が保たれている。また、地域住民との協働や地域農業団体等との連携により、集落景観の保全活動を推進している。



- 生物多様性調査結果（H27+R5調査）

・植物 364種 ・哺乳類 16種
・鳥類 54種 ・両性、爬虫類 12種 ・昆虫類 444種

在来品種の保全

にし阿波地域では雑穀や野菜の原種に近い種子が保存されてきた。これらを継承するために組合が設立されている。

- 在来雑穀系統数（維持）：15種（R6年3月時点）

高千穂郷・椎葉山の山間地農林業複合システム

～森林理想郷の伝統農林業と文化を未来へ繋ぐ～



世界農業遺産
高千穂郷・椎葉山地域
G.AHS Takikago Shibusen

世界農業遺産

平成27年12月認定

宮崎県高千穂郷・椎葉山地域

高千穂郷・椎葉山地域では、面積の約92%が森林を占める平地が極めて少ない状況下において、自然と調和した「山間地農林業複合システム」を構築してきました。そこには、農林業だけでなく、古来からの伝統文化を継承する強固な地域コミュニティが存在し、当地域のシステムの要となっています。



伝統文化



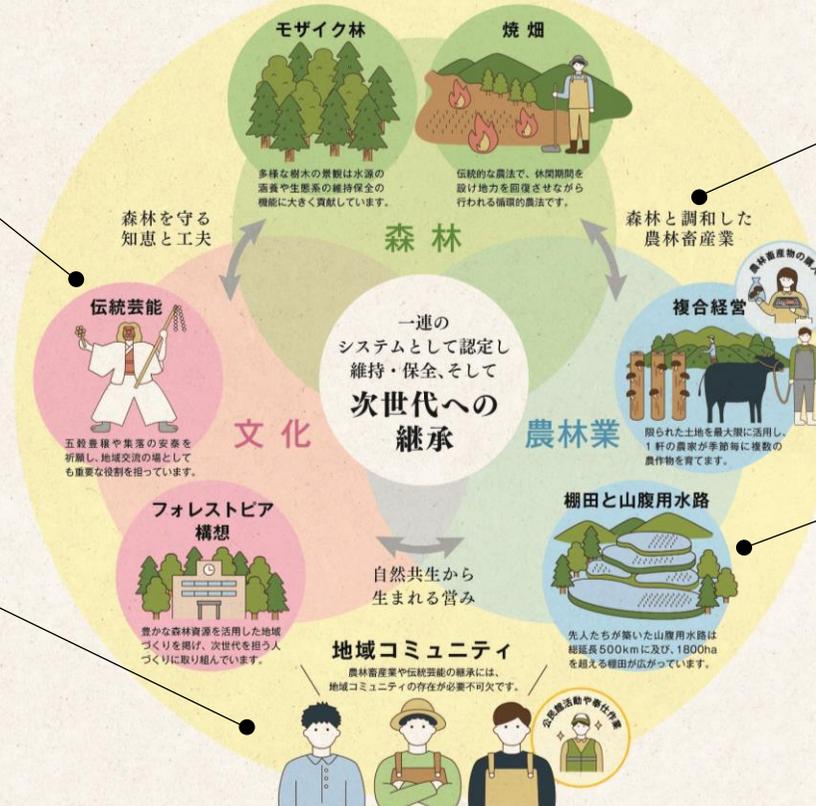
古来から生まれ育まれてきた伝統文化が今も息づいています。五穀豊穡や集落の安寧を祈願する神楽は当地域を代表する伝統文化で、約90の神楽保存会が現存しています。

地域コミュニティ



厳しい環境下において、農林業や伝統文化を継承するには、地域コミュニティの存在が不可欠であり、人々の手によって山間地農林業複合システムが成り立っています。

私たちの暮らしを支えている、高千穂郷・椎葉山の『山間地農林業複合システム』



複合システム



棚田での稲作、野菜・果樹・花卉の生産、林業、畜産など、土地や季節に応じて、複合的な経営が営まれています。また、椎葉村では森林と共存する循環的農業として焼畑も行われています。

山腹用水路



傾斜地にある棚田に水を確保するために、急峻な山腹に建設された山腹用水路。最古のものは、江戸時代中期頃に建設されました。総延長は約500kmになり、約1,800haの棚田に水を供給しています。

世界農業遺産認定による効果

戦略推進事業

宮崎大学GIAHS研究会の発足

国立大学法人宮崎大学において、当地域の調査研究を行う「GIAHS研究会」が発足しました。当地域のシステムについての様々な調査研究を行うとともに、年に1回の研究成果報告会を開催しています。

他地域との連携事業

熊本県及び大分県と連携し、2019年から3県合同でのPRイベントを開催しています。また、宮崎県内で日本農業遺産に認定された日南市及び田野・清武地域とも連携し、2022年に合同シンポジウムを開催しました。

開発途上国における世界農業遺産人材育成事業の受入れ

FAO駐日連絡事務所が実施する研修事業の一環として、ペルー共和国及びコロンビア共和国の大使館の視察を受入れました。2泊3日の行程で、高千穂町、五ヶ瀬町、椎葉村を訪問し、当地域の世界農業遺産関係者と意見交換するとともに、高校生との交流事業も実施しました。

人材育成事業

世界農業遺産3者連携協定の締結

宮崎大学、高千穂高等学校、世界農業遺産高千穂郷・椎葉山地域活性化協議会の3者で連携協定を締結しました。当地域の価値を学術的な観点から明らかにすることと認定を人材育成に活かすことを目的としています。

世界農業遺産教育プログラム

「GIAHSアカデミー」の開講

世界農業遺産について学び、地域に自信と誇りを持つことを目的に、高校生を対象にGIAHSアカデミーを開講しました。なお、高千穂高校ではGIAHSアカデミーは特別クラブとなり、五ヶ瀬中等教育学校ではGIAHS地域を基盤とした教育コンソーシアムが構築されるなど、世界農業遺産を取り入れた学校独自の取組も始まっています。



▲GIAHSアカデミーの活動風景

広報宣伝事業

PRイベント「パワーフードウィーク」の開催

宮崎市内のスーパーと連携し、2018年から毎年、世界農業遺産のPRイベント「パワーフードウィーク」を開催しています。当地域の特産品を使用した惣菜・お弁当等の販売や、直売所や道の駅等による店頭販売を実施し、世界農業遺産認知度向上と当地域への経済効果をもたらしています。

GIAHSアンバサダーの委嘱

地域内外の当地域の認知度を向上させることを目的に、アルピニストの野口健氏にGIAHSアンバサダー（広報大使）を委嘱し、野口氏による講演や、小学生との交流事業等を実施しました。

GIAHSビジネスマネージャーの委嘱

当地域の5町村で構成する一般社団法人ツーリズム高千穂郷が、事業の収益性を高めるためにGIAHSビジネスマネージャーを新たに委嘱しました。2023年から活動し、新たな特産品の開発等に取り組んでいます。

数値目標の推移(一部抜粋)

- 農林業新規就業者数:年平均20人(2021~2023)
- スマート農林業実証数:17回(2021~2023)
- 焼畑火入れ面積:110a(2018)→200a(2023)
- GIAHS研究会による調査研究:63件(2016~2023)
- 神楽保存団体数:97団体(直近5年で変化無し)
- 民間事業所等のロゴマーク使用件数:62件(累計)
- GIAHSアカデミー生による世界農業遺産出前授業数:15回(2021~2023)
- 小中高校生における世界農業遺産の認知:95.2%(2022)
- 世界農業遺産をテーマとしたツアー商品数:24商品(2021~2023)

阿蘇の草原の維持と持続的農業

～継続はタカラ～



阿蘇市 高森町
南小国町 南阿蘇村
小国町 西原村
産山村



世界農業遺産
平成25年5月認定

熊本県阿蘇地域

阿蘇の広大な草原は、野焼き、放牧・採草という農業上の利用により千年もの長い間維持されてきたもので、この営みを通じて地域固有の文化、生物多様性、景観が形成され、今も多様で豊かな資源が守られています。

多彩な農林産物



阿蘇は、農地改良の結果、トマトや米等多様な農産物の生産が盛んに行われています。また、小国杉は全国的なブランドとして知られています。

阿蘇の持続的な草原管理システム



野焼き→放牧→採草のサイクルにより、阿蘇独自の持続的な管理サイクルが確立されていることで阿蘇の草原が維持されています。

阿蘇の農業システム



生物多様性と生態系機能

持続的な農業システムにより、阿蘇では、数多くの希少種が保存されています。



農業と関わりの深い伝統文化

阿蘇には多くの農耕祭事があり、阿蘇山火山による被害を鎮め豊作を願う人々の営みの様子が表されています。



優れた景観と水の恵み

阿蘇は広大なカルデラを形成し、水源涵養機能（草原、森林等）により北部九州の「水がめ」と呼ばれています。



世界農業遺産認定による効果

農林畜産業の振興

阿蘇産農産物等の消費拡大

- ・ 県内外を問わず、阿蘇産農産物等の消費拡大を促進するため、様々なイベントを実施。
- ・ 6次産業化に取り組む団体や農業遺産を活用した周知・啓発・PRに取り組む団体へ支援を実施。



▲ベジフル感謝祭
▼産山村の甘酒「うぶあま」

- 東京都豊洲市場「豊洲場外マルシェ」への出展 (R4)
- 福岡市福岡大同青果「ベジフル感謝祭」への出展 (R5)
- 料理ソムリエ講師による料理教室「ベジフルクッキング」の開催 (R5)
- アニマルウェルフェアで飼育した豚肉と阿蘇産高菜を使用した商品開発 (R5)
- 産山村産の米で作る甘酒の販路拡大 (R4)

など

草原・景観の保全

野焼き→放牧→採草サイクルの保全

- ・ 野焼き再開に取り組む団体への支援を実施。
- ・ 草原・景観維持にも寄与する繁殖あか牛導入への支援を実施。
- ・ 採草活動や茅刈り活動についても支援を実施し、地域経済にも寄与。



▲草千里ヶ浜の野焼き

景観の保全

- ・ 阿蘇の風物詩でもあった草小積み再生への支援を実施。



▲草小積み

- 野焼き再開支援: 3牧野組合
- 繁殖あか牛導入支援: 152頭
- 採草活動支援: 約417ha
- 草小積み再生支援: 78基

※過去3年分

(R3~R5)の実績

交流の拡大

各種イベントによる交流人口の増加

- ・ 交流人口の拡大を目的に、「阿蘇地域世界農業遺産フットパスコース」を作成。地元ガイドの協力もあり、阿蘇地域の景色や暮らし、文化を体感できるイベントを実施。
- ・ 県内外におけるPR活動はじめ、執筆活動、クイズイベント等幅広く実施。



▲フットパスイベント
▼九州世界農業遺産フェア

- 新千円札発行記念として、北里柴三郎の出身地小国町でフットパスイベントを実施 (R5)
- 九州世界農業遺産フェアへの出展 (※)
- くまもと農業フェアへの参加 (※)
- 大日本農会会誌「農業」における執筆 (R5)
- 伊勢丹新宿ギフトセンターでの展示 (R3)

など

阿蘇から世界へ

2025年大阪万博のパビリオンに

- ・ 2017年から「阿蘇の茅材」の商品化と野焼きのリスク軽減を目的に「茅刈りプロジェクト」を実施。
- ・ 2025年4月から開催されている大阪万博のパビリオンに阿蘇産の茅が使用され、さらなる進展が期待。



▲茅刈り説明会



▲茅刈り



▲大阪万博の効果

クヌギ林とため池がつなぐ 国東半島・宇佐の農林水産循環

～森の恵み しいたけの故郷「木が食材を生む」～



国東半島宇佐地域
世界農業遺産
Kunisaki Peninsula Usa GIAHS



- 1 豊後高田市
- 2 杵築市
- 3 宇佐市
- 4 国東市
- 5 姫島村
- 6 日出町

大分県国東半島宇佐地域

しいたけ栽培のほだ木に利用するクヌギは、約15年のサイクルで伐採・萌芽・再生を繰り返し、クヌギ林が維持されます。クヌギ林は雨水を蓄え、そこから有機物を含んだ湧水をいくつものため池に溜めて、農業に利用します。

世界農業遺産

平成25年5月認定

豊かな自然・産業を育むクヌギ林

明るいほだ場を活用し、高品質な乾しいたけを生産

しいたけ原木の供給 / 膨軟な土壌による保水
安定した湧水の維持 / 地域景観の形成

クヌギの循環システム

原木

落ち葉

ほだ木

廃ほだ木

膨軟な保水層を形成

保水層が雨水をかん養

有機物
栄養塩

複数のため池を連携させた用水供給システム
約1200のため池群

水の循環システム

灌漑用水として利用

農業用水の供給・治水 / 地下水かん養と水質浄化
水辺風景形成 / 生物多様性の維持

水田農業



地域内には、15世紀からほとんどそのままの姿で現在に伝わる農村景観もある(左)。シチトウイは、い草より強健で耐久性に優れた畳表の材料で、現在は国東半島地域が国内唯一の産地(右)。

育まれる生物多様性・文化



オオイタサンショウウオ

ため池をつないだ用水供給システム



複数のため池をつないで農業用水を供給するシステムは、貴重な水を効率的に利用する雨の少ない半島ならではの知恵から生まれたもの。



特産のしいたけ

どぶろく祭り

次世代への継承

小学校、中学校、高等学校で世界農業遺産に関する学習を実施

- 小学校: 世界農業遺産を題材とした教材本(マンガ)を使用した授業を実施
(R5年度 認定地域内全59校)
- 小学校: 世界農業遺産を題材とした作文コンクールを実施(R5年度 応募点数21校・141点)
- 中学校: 農林水産業従事者を講師とした出前授業を実施(R5年度 認定地域内全23校)
- 高等学校: 農業者等に聞き取りを行い記録を残す、「聞き書き」を実施(R5年度 県内11校)



▲教材本(マンガ)



▲中学校特別授業



▲高校生聞き書き発表会

- ✓ 生まれ育った地域への理解と誇りが醸成されている。
- ✓ 聞き書きに参加した高校生が地元で就農を目指しているなど、農業を担う次世代の育成につながっている。

地域の元気づくり

魅力発信

- 多様な媒体による世界農業遺産の魅力発信
- 他の認定地域と連携した魅力の発信

交流人口の拡大

- 地域資源の発掘と磨き上げ
- 受入体制の整備
- 地域の自主的な活動への支援

ブランド化

- 世界農業遺産地域ブランド認証品を4品目設定
(乾しいたけ、シチトウイ加工品、米、茶の湯炭)
- シンボルマークを貼付した世界農業遺産応援商品の拡大(61企業・団体282商品)



▲田植え体験交流



▲ブランド認証品「茶の湯炭」

- ✓ 認知度向上による、来訪者の増加や地域商品の販売促進
- ✓ 地域の自主的な活動の広がり



▲各種応援商品